

8. パネルディスカッション

司会：高際 澄夫（宇都宮大学名誉教授）
パネリスト：赤上 剛（渡良瀬川研究会副代表）
鈴木 聡（足尾に緑を育てる会会長）
朴 孟洙（韓国・円光大学校教授）
辻岡 幹夫（自然公園財団日光支部所長）

高際： 講師の先生方の話は、考えていた以上に内容が深く、足尾の問題というものを一層考えていきたいという思いに駆られました。まずは、講師の方々から補足をいただいた後、たくさんの質問に答えていただきます。



赤上：先ほど触れなかったことを申し上げます。渡良瀬川の水は飲料水としても使われています。直接的には、草木ダム下流のみどり市・桐生市・太田市が飲料水として使っています。間接的には、渡良瀬遊水地の貯水ダム（常時飲料水として流出させてはいないが）から渡良瀬川・利根川を経て江戸川に入り東京都民の飲料水にもなっています。だから鉍毒の問題というのは田畑の問題に止まらず非常に重要です。今は鉍毒がないように思われていますし、古河機械金属もそういうことはないという風にいっております。群馬県が今年から「オートサンプラー」（自動採水装置）を付けて増水時に汚染度を調査しています。その検査によれば、時には基準値を超えた亜鉛などが検出されています。鉍毒水は現に流れているし特に洪水、大雨の時は顕著に出ています。加害者・古河機械金属だけが調査していた時は、きちんと測って報告されてはいなかったと聞いております。今度からは県の方で調査をしていますから、客観的な検査結果がでているのだと思います。古河機械金属が汚染水の浄化作業をやっているが決して万全な体制ではなく、草木ダムで一旦汚染をおさえているけれども下流に影響があるという現実直視しなくてはいけないということです。堆積場 14カ所の問題も含めてこのままでいいのかという課題が残ります。

鈴木：2点ほど補足でご紹介いたします。最初に、私たちの会では「大畑沢緑の砂防ゾーン」から始めて、約4万本の植樹をしたという話をしました。もう19年目です。観察デーに見ますと、密集して植えていますから、そろそろ間伐しないといけないという時期に入りました。もう遅かりしというところもあります。去年の観察デーの時には、前もって専門の人に「この木は切りなさい」と印を付けていただいて間伐をいたしました。間伐した木はどうするのかというと、また自然に戻したいのでチップマシーンでチップにし、いろいろなところに蒔くという形で、間伐材を再利用します。細い枝など利用できるものについて今後は、技術は要りますが、せっかく子供達がいっぱい遊びに来てくれたりしているので、足尾に来た記念にキーホルダーのようなものや、コースターにして、記念品を渡したいと取りかかっております。

もう1点は、辻岡さんから食害の話がありましたが、確かにシカの頭数は以前に比べると、減ってはいないです。結局、我々が植えたところも食害に遭っています。そのためにもっと増えたのではないかというお話をいただきましたが、確かにその傾向はあったかなと思います。我々が餌を蒔いているということも考えられなくもないのです。植樹エリアの周りは、シカが入れないように、全体をネットで囲んでいます。シカも当然入ろうとしますが、最近では、特にイノシシが足尾に増えてしまったのです。以前はほとんどいませんでした。イノシシはネットの下に穴を掘り、中へ入ってこようとします。彼らの力はものすごいのでネットまで破いてしまいます。イノシシが破いて入ったところに、今度はシカが入ってきてしまう。我々も年に1、2回は柵の周りを回って点検します。ところが我々スタッフも高齢化で、あの尾根を回って柵を補修するのは大変な作業なのです。従って、その作業が追いつきません。山を見てみると「あそこにシカが入ってきているよ」ということが結構あります。そういった補修作業・点検が追いついていないというのが現状です。それがやはり今後の課題かと思っております。

朴：去年参加した時に赤上先生から宿題をいただきました。田中正造さんが東学党を高く評価したということは、当時何人かの思想家も同じだったという話を聞き、帰ってから、博士論文を書いている大西先生と一緒に、1896年頃に書かれた資料全部を検討しながら、田中正造さんの立場がその後どうなったかをすべて比較しました。そうしたら、その立場を一貫して保持していることが確

認され、やはりそれが田中正造さんが、韓国から高く評価されるひとつの背景ではないかと。例えば、福沢諭吉の当時の朝鮮に対しての立場とか、新渡戸稲造の朝鮮に対しての立場とかは変わりますね。最初の良い評価から悪い評価に。でも田中正造さんは、今の段階ですけれども大西先生と一緒に検討したら、東学党と当時の朝鮮農民に対しての評価は一貫していますので、高く評価すべきではないかと思っております。以上が補足です。

高際：前回、赤上先生は「正造は当時のいろんな人の影響を受けて東学党の評価をしたのだろう」とおっしゃいましたが、今回、朴先生は「それからもずっと田中正造は考えを変えなかった」とお話しになりました。これはやはり正造がずっと実践し続け、政府・企業と戦い続けたことの意義だと思います。そのように正造が一貫した姿勢を保てたということではないかと考えております。

辻岡：今、鈴木さんから柵の点検が大変だというお話がありましたけれども、これは私も実感しているところございまして、奥日光の戦場ヶ原と小田代ヶ原の周りを環境省が、シカが入らないように柵で囲っています。この巡視・点検の仕事を私共の自然公園財団で請け負って、実施しております。その点検の回数は、1周 17km ありますが、それを1ヶ月に8周することになっています。17km ぐらい1日で歩けるじゃないかと思われそうですが、そんなことはなくて、登り下りがあったり、笹藪の中であったりするので、4つの区間に分けて4分の1ずつ回っておりますけれども、それで月に8周ですから $4 \times 8 = 32$ で毎日誰かが歩かなければならないという状況になっていまして、でもしょっちゅう風が吹くと倒木がその辺に倒れ込んで壊れたりとか、少しでも大雨が降ると土砂が押し出してきて柵が傾くとか、そのためにスコップを持って土砂を固めに行ったり、チェーンソーで木を切ったりとか、やっています。柵の管理というのは、大変な苦勞を伴います。そうしないと、中の植物が守れないわけです。この努力を一体いつまで続けるんだと、やはり根本的には、この地域全体のシカの密度を下げていくことが根本になると思いますので、関係するところが力を合わせて、目指して努力していく必要があるのかなと感じております。

高際：実際にやっておられる方のご苦勞というのは、我々わからないところがありまして、控え室で辻岡さんとお話ししていても、びっくりすることばかり

でした。さてたくさんの質問をいただいております。最初に赤上先生。

質問 1：銅は毒でしょうか。鉍毒のひとつでしょうか。

質問 2：“足尾はまだ終わっていない”について、日々最もこれを感じている人は実は古河関係の足尾鉍山管理をしている人々かと思います。当時の古河の人と違い、今の古河の人は真剣に被害防止に取り組んでいるように思います。このような今の人の評価をどのように受けとめていらっしゃるのでしょうか。今の古河の人は、何かを背負っている印象を受けることもありお尋ねします。

赤上：まず最初に銅は毒なのかという質問です。銅というのは人間にとって銅や鉄分が足りないなどというように不可欠な要素でもあります。問題は銅だけが流れてくるわけではなく硫酸銅、ヒ素、亜鉛、カドミウムなど複合汚染による鉍毒だということなのです。銅毒問題は古くから論議されました。田中正造が直訴した後に第二次鉍毒調査委員会が内閣に設置されこの問題が取り上げられました。東大教授の入沢達吉という学者はベルツに教えを受けた日本医学の父といわれる第一人者です。その最高権威者の入沢教授が、鉍毒調査委員として「足尾銅山の銅による銅毒はない」と証言しました。銅の流出がいくらあっても人体に影響はないというのです。これに対して東京鉍毒事務所の左部彦次郎（さとりひこじろう）という東京専門学校（今の早稲田大学）を出て、被害地でないところから支援運動に参加した青年が、『鉍毒と人命』という反論本を出版しました。「入沢達吉というのは最大の学者なのに銅だけを捉えて鉍毒被害はないというのはなんたることか。銅や硫酸銅などを含めた複合汚染としての鉍毒を判断すべきだ」と喝破しました。これを受けて田中正造は「頭のいい人は学問をすればするほど物事の本質が見えなくなってしまうようだ。入沢達吉東大教授はまるで殺人学者だ」と真つ向から批判しました

2 番目の質問「現在の古河の社員達はちゃんとやっているという風に思うが、どう思うか」についてお答えします。私も渡良瀬川鉍毒根絶太田期成同盟会の毎年 1 回の足尾への山元調査にいつも同行しており古河の社員の皆さんに何度も接しております。今の社員は加害時に働いていた人たちではありませんし皆さん真面目にやっているなと思っております。しかし企業の論理としてどうかという基本姿勢の問題があることを指摘せざるを得ません。例えば源五郎沢堆

積場が 3.11 の時に決壊しました。2 度目の決壊です。その前の年 2010 年の山元調査の会談席上で私は質問しました。「海外の事例ではあるがことし（2010 年 10 月 4 日）ハンガリーのアルミニウム精錬工場の廃液貯水池が決壊して有毒物質が流出し 9 人が死亡、120 人が入院、近くの川の魚介類が壊滅し被害は 70 キロ下流のドナウ川にも達したという大被害が起きましたね。（『朝日新聞』同年 10 月 23 日朝刊報道）今迄古河は、『堆積場が決壊する可能性は全くない、ない』と伝えてきたが、こういう事故を見ると可能性はあるんじゃないですか」と。すると古河の足尾の責任者が、「国の基準をちゃんと守って堆積場を管理している。だから安心してください。」と答えました。

しかし翌年 3.11 で再度決壊しました。その年の山元調査の時に、私は「古河は事故はありえないから安心しろといていたけれども現に決壊したじゃないか」「国の基準を守っているということだけでは責任を果たしたことにはならないのではないか、今回事故の対策をどう取るのか、またまた決壊したらどうするのか」と質問しました。

古河は「国の指示を待っています。今、国が検討しています。国に示してもらった基準を守っていきます」という相変わらずの答弁でした。自らの企業の責任としてどう対策をとるかという「意識が弱い」というより「意識がない」という感じがします。これはどの企業でも共通かもしれませんが、国の基準とか法律の基準を守っていればいいじゃないかということだけでは事故の再発は免れないと思います。

会社の意識という関係で緑化事業についても触れたいと思います。何度も言いますが最大の加害者は古河です。しかしながら、先ほど申し上げたように国は古河に対する国有林の損害賠償請求権を放棄していますから古河には法的には植林をする責任はありません。しかし道義的責任は免れません。鈴木さんを始めボランティアの方がたがこれだけやってくれているわけですから、会社はよりお金を投下するとか社員ももっと参加すべきではないでしょうか。古河の社員はこれまであまり参加して来なかったし、参加するようになったのは最近ですよね。お金もあまり出していなかったようです。

松木沢というのは、古河市兵衛が煙害で住めなくなった村人から 4 万円で買い取った土地ですから松木沢は全部古河の土地です。そこは、ボランティアに頼ることなく自ら緑化していくべき土地でしょう。ところが、緑化に対する会

社の姿勢はどうでしょうか。大きな企業は毎年『環境白書』というものを作ってPRしています。古河機械金属もカラー写真入りの立派な『環境白書』を出しています。そこには毎年環境、緑化対策として我が社はこう努力しているということを書いています。4年ほど前の白書には「松木沢の緑化に対して我が社はボランティアの皆さんに無料で土地を提供してあげています。」とありました。私は山元調査の時に「こういう風を書く会社の姿勢はなんだ。自分の土地は自分で緑化するのが当然なのに『ボランティアの皆さんにタダで土地を貸してあげて、緑化を手助けしている』などという会社の姿勢は言語道断だ」と強く抗議しました。すると翌年はその部分がカットしてありました。(笑)

企業論理で、足尾地区は古河機械金属にとってマイナス事業に金を使うという意識なのですね。利益があがることではありませんから。松木沢堆積場のカラミだって、今までは商品として海外へ売っていたのですがバーゼル国際条約で売れなくなったから残存した山になっているのです。どの企業も儲かることには金を使うけれども、儲からないことに金を使うことはしない。だから古河は儲からないこともやっているのだからそれなりに評価できる側面はあるでしょう。しかし最大の加害、100年以上たっても元に戻らない害を与えているんだから企業グループ全体としての責任をもっときちんと果たすべきだと思います。このところはまだまだ物足りないのではないのでしょうか。

質問 3: 足尾の植樹活動について。太陽光発電のパネル設置のために、平野部の林や木々が伐採される所が増えています。これは足尾の場合と違うと考えるか、子どもからのもしもの質問にはどのように説明なさるのでしょうか。

質問 4: 下流域の子ども達などが「土」を持ってきたり、植えたい木を持ってきたり植えることに、足尾の本来の植物生態系を乱してしまう心配はないのですか。

鈴木: 第1点ですけれども、確かに私たちは人間の手で破壊した自然を、私たちの手で戻そうと今、やっております。今の質問は太陽光パネルを設置するために自然を破壊しているのではないか。私たちの今やっていることと相反することなのではないか。私もそれはですね、なるべくなら破壊しないで太陽光パネルを設置できる場所を選ぶべきだと思います。ただ、人間は自然との折り合いをうまくつけられる知恵を持っていると思います。本来、その知恵を出して

いないが故に利益優先でやってきたことが、結局今の世の中になってきたのではないかと私は思います。ですから自然破壊じゃなくて、自然をいかに利用するかという部分で考えた時には一歩立ち止まって後ろを振り向いて、これでいいのかなと考える時間を少しとって欲しいです。その本来の目的に敵うことなのかどうかをしっかりとみんなで考えて、それでよかったらゴーサインを出せばいいと思います。ですから、例えば「ここだけ伐採しないと作れない」という時、「本当にそれでいいのかどうか」を考えるべきです。それで知恵を出して、なんとか伐採しなくてもいい方向があるか、あるいは伐採してもまた別の方法で自然回復のために何かできるのか、実際は太陽光パネルというのは素晴らしいものですから、これは人間社会にとって、今の火力発電よりいいことは間違いないです。そういう部分で、どちらがいいかを考えるのではなくて、人間はもう少し知恵を出して常々行動すべきではないかと私は思います。それだけの知恵を人間は持っている、と私は思っていますので決して悲観せず、相反するなど考えるのではなくて、もっと違う部分で考えられる知恵があると思います。それが私の意見です。

もう一つ下流地域の子ども達が足尾に土を持ってきて、入れる、木を持ってきて植え、育てる。それで足尾の生態系が崩れるんじゃないかと。確かにこれは何とも言えません。本来の足尾の山は、先ほど辻岡さんも言っていたようにブナの原生林だったと思います。ですからその辺のことを考えると何がいいか、先ほどの私の発表でも言ったように、何がいいかということはわかりません。それだけ足尾の山の土壌は痩せてしまっています。酸化が強いんです。だから新しい土を入れていかないと苗木が活着しません。すぐ枯れてしまいます。新しい土を入れる、あるいは客土するという形で国と県は基礎工事をやりますけれども、それだけではまだまだどうなるかわからないです。30cm 新しい土を入れても苗木の根が 30cm 下に伸びれば、元の侵された土のところまで根が伸びていきます。その時に、果たして苗木がちゃんと生育できるかということ、誰にもわかりません。その大畑沢で4万本植えたけれども約3分の1が活着して、今成木が5~6mに成長しています。これが現実です。成長もしています。子どもだけでなく、多くの方が、そのように土まで自分たちで持ってきてくれます。足尾の土よりは、下流地域の人たちが持ってきてくれる、家の周りの土の方が、絶対に質がいいはずなんです。これは間違いないと思いますので、このよ

うに持ってきていただければ、私たちとしてはありがたいです。以上です。

高際：とにかく今は実験段階というところですよ。その中でうまくいった所を選んでいるというところに今入りつつあるというお話です。

質問 5：流暢な日本語で、ハンサリムについて熱く語って頂き、ありがとうございました。田中正造がこの佐野だけでなく海外でもその存在が知られることは、佐野市民として嬉しい限りです。ところで、現在の韓国は、大統領自らが、日本と日本人をおとしめる言動を国内外に発しています。反日教育も盛んな状態の中で、日本人である田中正造のことを、ハンサリム運動を推進する人々に紹介したとき、どんな反応だったのでしょうか。ハンサリム運動を推進する人々からの反抗がゼロではなかったと付度するのですが…。「逆も真なり」で、田中正造を通して韓国人と日本人が本当に互いを理解し合えれば、両国の未来は明るくなりますね。

質問 6：田中正造との共通点の発見で、正造ならではの発見がありましたら教えてください。正造によって気づかされたことが何かありましたらお願いします。

質問 7：ハンサリム運動からみた韓国内の原発稼働について、ご意見がありましたらひと言お願いします。

朴：私は韓国の大統領は本当の大統領じゃないと思っています。（笑）国民の気持ちがわからない、理解できない人ではないかと思います。だから私は大統領がおっしゃっていることには 100%反対しています。それが私の本当の考えです。それから朴大統領が日本に対しておっしゃっていることは自分の政権のためですね。韓国の国民のためじゃなく、自分の政権を守るための発言なので、保守的な方からは一部支持されていると聞きますが見識ある方々からは全然支持されていない。まずそれをみなさんの前で申し上げたい。だからハンサリムの内部で田中正造さんのことを強調したら、今までは一人も抵抗したり、反対したり、批判する人はいませんでした。これからはわかりませんが。正造さんが持っていた問題意識とハンサリムが持っていた問題意識が全く同じではないかという意識で、ハンサリム内部では、かなり共感するものがほとんどではな

いかと思います。私が一番正造さんから学んだことというのは、最後まで戦うという姿勢です。今世界を悪くする一番大きな問題を持っている存在は、国家（政権）ではないかと思います。その国家主義に対して最後まで戦ったというのが、私が一番興味のあるところです。だから私も最後まで国家主義に対して戦っていこうと思います。

次に日韓の歴史認識問題ですけれども、実は私が関わっている歴史学会のレベルでは 90 年代から東アジア 3 国の良識のある研究者が一緒になって、歴史の教科書を作っています。その歴史の流れは変わらないと思います。政府は何を押し付けられても 90 年代から始まった流れ、まだ大きくはなっていませんが、その流れは変わらないどころか、だんだん大きくなると思います。だから今は政治レベルでいろいろな問題が起こっていますが、見識のある研究者のレベル、また市民のレベルで相互理解と連帯が、これから大きくなると私は信じております。

例えば私の場合、2 人の娘がいますけれども、3 年くらい日本で一緒に生活しました。長女は中学・高校、次女は小・中学校。当時（15 年前）北海道でできた友だちと行き来しています。私はそれに対して「考慮しなさい」などとは言いません。自分たちの意志で行き来しているのをみると、私は希望を持ちます。やはり若者たちは国家主義や民族主義に捕らわれない、そういう時期になっているという印象です。

長女は現在、非正規労働者を支える社会新運動組織の活動家ですけれども日本の皆さんがいらっしゃる時には通訳したり、日本語で案内したりそういう自然な形でやっています。次女はまだ無名のミュージシャンですけれども、最近札幌で、日本のプロダクションの事務局員をしている中学の時の友達と活動していて、社長さんから声をかけられ、日本で一緒に活動しています。

いわゆる政治レベルとか政権レベルではいろいろな問題があるかもしれませんが、未来の世代、将来の世代のレベルではお互いの立場を尊重し、理解しながら一緒にやっていくという流れでいいのではないかと思います。

最後は、反原発の問題ですけれども、ハンサリムの場合は、今年の初めくらいにいわき市で綿花を栽培して、製品にして、売って、反原発運動をしている事務局長を招いて、大きな学習会を私たちハンサリムは開きましたけれども、

韓国の支援団体からものすごい批判を受けました。汚染されている綿花を韓国にわざわざ持ってきてどうすればいいのだと反対を受けましたが、ハンサリム内部では今の段階では公害の問題とか過去の問題とか、国境を越えています。地球、グローバル全体の問題ですから、ハンサリムの場合は、反原発に対してかなり大きな力を注いで（金銭面でも）、日常レベルでの反原発運動を頑張っています。それを韓国のいろいろな団体からも評価されているという状況を報告いたします。以上です。

高際：やはり朴先生のお話を聞くと大賛成！と嬉しくなりますね。宇都宮大学国際学部にはたくさんの韓国の学生が来ております。そして丁先生も活躍されています。若い人達が交流を深めるということがいかに大切か、と思います。

質問 8：手荒ですが、自衛隊にお願いすることは何が問題となるのでしょうか。

高際：それから付け加えて、辻岡さんをお呼びするきっかけとなったことなのですが、植樹されたのではなくて大きな木のあるところの下、林床のところシカに食われて草がなくて、「これは危ないよ」と同僚の生物学者から言われ増した。ここから地滑りが起こるんじゃないか、そういう危険もあるよと言われたので、そういったことについてもお話をしていいただければと思います。

辻岡：自衛隊を使ってシカを捕ったらどうかというご意見ですけれども、今の自衛隊法では対応できないのだろーと思います。ただ法律的にできないだけではなくて、シカは日本の山野に広大な範囲に渡って生息していますから、そこに入っていくって捕るというのは技術的にも難しいのではないかと思います。自衛隊も、野生動物を捕る技術は持っていないのではないかと思います。（笑）

それから、あの足尾の森林がある程度成立しているけれども、林床には草がなくて、崩壊につながる心配があるのではないかと、というお話ですが、それはその通りだと思います。足尾だけでなく、奥日光でも至る所でそういった崩壊の兆しが表れています。先ほど生物多様性のお話を中心にししましたが、実はその国土保全上、土砂崩壊防止というかそういった面でも、だんだん問題が顕在化しているのではないかと感じております。

高際：私個人として2つほど、皆さんにお聞きしたいことがあります。

一つめは、堆積場の問題というのがあります。明日行きますけれども、たくさん問題があるが、外からは見えない。しかし源五郎沢のように、何かがあると崩れるかもしれない。そういったことに対して、赤上先生はずっと警告を発しておられるのですが、例えば地元におられる鈴木さんなどは、そうした緑化を進めながらも堆積場の問題ということに関してはどのようにお考えか、お話を伺えたらと思います。

二つめは、私の大きなものでみなさんどのようにお考えになっているのかですが、田中正造が偉いのは、谷中村問題だけでなく、赤麻沼についても渡良瀬川を通すなどと言って、彼が死ぬまでは工事も行われなかったわけです。それは予防原則の観点から見ると、素晴らしいと思います。今のように自然が崩れた後では、再生のために努力しなければならないというのはわかるんですけども、何と言っても自然の破壊を防ぐための予防原則というのは非常に大切で、私は今、日本が大きな危機を迎えていると思います。すなわち、自然の破壊、それから開発、そして戦争の問題があります。こうしたことについて皆さんの考えを少しでも伺えたらと思います。

鈴木：地元代表でということですので、大変難しいですけども、私は足尾で生まれまして、高校からは埼玉に行きました。約17年埼玉にいました。その後親の面倒をみるため、足尾に戻って来たのですが、子供の頃に感じていたことというのは、ほとんど企業城下町ですから、100%古河鋳業に依存する形でみなさん生活していたのです。私も子供なりに感じていたというか、逆に何も感じていなかったというのが正直なところですね。とにかく生活のほとんどが古河に依存していました。もう全て、着るもの、食べるもの、そして水、お風呂なんかも共同風呂です。そういうところで育ってきていました。小学校の頃は、運動会、体育の時間、休み時間は校庭に出ます。風向きによっては煙害です。淀んで霧がかかったようになる時があったり、喉が痛くなったりする時がありました。でもその時の私はなんだこれはというような疑問を一切持たず、何も感じていません。他の子ども達も同じようだったと思います。要はそれが当たり前の生活だった。それが悪いというか、なんかおかしいと思ったのは足尾に帰ってきてからです。1回外に出て。とにかく足尾を過疎化からなんとか脱却しなければならぬということで、若い人たちが集まって「足尾を考える会」と

いうのを作りました。集まって酒を飲みながらいろいろやっていました。そういうところから、あるとき小学生と中学生に「足尾の町を色で表すと何色ですか」というアンケートをとったら、9割以上の生徒さんが「茶色」もしくは「黒」と答えました。これはなぜかという、外に一步出れば大体はげ山。長屋文化ですから、屋根はコールタールを塗っているわけです。なので、家自体が黒く見えるのです。だから子ども達にはとにかく、景色全体が「茶色」か「黒」にしか映らなかったのですね。これでいいのかなということが最初の疑問点で、そこから色々始めました。

それで今の質問ですが、古河鉱業から今は古河機械金属と会社名が変わりました。今も企業活動はしています。但し、銅山に関わってきている色々な事業所は遺産となってもう稼動していないわけです。しかし堆積場と浄水場はそのまま残っている。14ヶ所の堆積場がそのままである。これもまたどうするんだという話は、当時、我々もどうなってしまうのだろうということを話し合いました。これは企業の努力、企業で管理しなくてはならないよね、という話になりました。では、「管理は国がやってくれるのか」といえば「いや、やらないだろう」という意見も出ました。やはり企業の責任でやらなければならないのではないのでしょうか。そうするとやはり企業体力がどれだけあるかということが重要であって、それが前企業だとパンクしてしまった。そうはいってもそれを突き詰めていくだけの力が、我々にはありませんでした。そういう活動は一切しませんでした。ただ今、我々と古河さんは、植樹する問題で土地を貸して頂いたりしています。ですからそういう部分では、つながりは今も親密にやっていますし、現実的に古河さんが植樹をしていないかという、しています。今現在は空き地になった社宅があったところはどんどん壊し始めています。社宅があった空き地をそのままにしておくのではみっともないですから。それはきちんと担当の方がいて、壊したところはすぐに植樹をしています。

この間も天皇皇后両陛下が環境センターにおみえになり、私の方で少し説明したのですが、その前に古河の会長さんもいらっしゃいました。その時にもちょっとお話ししたのですけれども、やはりとても気にしておりました。それでこれからも頑張ってやりますよ、ということでお話を伺ったので、私としてはお話ができたことは、大変よかったなと感じております。地元としては、堆積場と浄水場。私としては半永久的に管理して行かなければならないと思います。どこかで「もういいな」というところはないのです。あのままでいる以上は半

永久的に誰かが管理していなくてはいけない、そういうところなのです。いつ誰がやるのか、というところは時代時代できちんとやっていかないと、そのうちに大変なことになりかねない、地元としてはそういう気持ちでいます。

高際:私もこの問題は非常に難しい問題であると思っております。とにかく正造が言ったこと、すなわち自然を壊さないということが日本ではなおざりにされています。それから、「人を殺さざるべし」の主張から考えれば、戦争をしないようにすることが大切ですが、今、憲法 9 条が破られようとしていることに、非常に危機感をおぼえて、もう一度予防原則を考え、朴先生もおっしゃいましたが、正造が言った「真の文明は…」と、あの言葉を噛みしめる時代に来ているのかなと思います。



講師の先生方にはもっとお話をしていただきたかったのですが、時間をオーバーしてしまいますので、以上でパネルディスカッションを終わります。

皆様のご協力、本当にありがとうございました。